『太平広記』鬼部説話の構成 ― 鬼三十一～鬼三十五 ―

The ghost stories of "Taiping Guangji" vol.31 ～ vol.35

三田明弘
MITTA Akihiro

はじめに

本稿は、唐代までの中国鬼話の集大成である『太平広記』鬼部説話四十巻のうち、巻三四六「鬼　三十一」から巻三五〇「鬼　三十五」までの鬼話の特徴を分析しつつ、盛唐期の鬼話の特徴を解き明かすことを目指したものであり、論者の既発表論文「『太平広記』鬼部説話の構成―鬼一～鬼十―」[1]「『太平広記』鬼部説話の構成―鬼十一～鬼十五―」[2]「『太平広記』鬼部説話の構成―鬼十六～鬼二十―」[3]「『太平広記』鬼部説話の構成―鬼二十一～鬼二十五―」[4]「『太平広記』鬼部説話の構成―鬼二十六～鬼三十―」[5]の続編である。

右の五本の論文において、巻三一六「鬼　一」から巻三四五「鬼三十」までの説話を分析し、鬼話の代表的な話型パターンを7種類に大別した。以下にそれを掲げる。

①冥婚譚　男が女の鬼と結婚するパターンが多く、女と男の鬼の例は少ない。跡継ぎの子を産む場合も有るが、夫婦は長く共に暮らすことはない。

②塚墓宿泊譚　一夜の宿を借りた家が、翌朝起きて見ると墓であったという話。冥婚譚にもよく見られる話型である。

③変鬼帰還譚　鬼となった家族や友人が帰ってくる話。死後の自分の身分・境遇、鬼ゆえに知り得る現世の人々の未来、冥界の秘密などを鬼が語る。仏教の影響が強まるにつれて追福を求めるパターンも増えてくる。再婚した配偶者への憎悪から鬼が出現し、かつての妻や夫に危害を加える例も多い。

④冥界召喚譚　冥府の吏である鬼が人を冥途に召喚する。命に従い冥途に赴く話もあるが、賄賂や身代わりなどの手段で死を免れようとする話が多い。

⑤鬼神遭遇譚　外や自宅（厠の例も多い）などで鬼に遭遇するという話型。逃げたり争ったりする展開の場合は、その場で取り殺されなくても、間もなく絶命する話が多い。鬼神に改葬や廟の修復を依頼されるというパターンも少なくない。

⑥凶宅鬧鬼譚　家に鬼が居ついて、家人を悩ませるという話型である。

初期の鬼話にも多くのバリエーションが見られる。その家の元の持ち主であったり、外から来たり鬼の出自も様々であるが、振る舞いも騒霊現象程度から家人の命を奪う話まで多岐にわたる。食を盗む、食を求めるという要素が多くのに見られる。例は多くないが、家の人を助ける鬼の話もある。

⑦冥事占判譚　人の運命（冥事）を知ることが出来るということが鬼の大きな特徴の一つであるが、優れた道士なども鬼と同じように冥事の情報にアクセスできる。そのような人や鬼が、人の運命に関する情報を知り、予言したり運命を操作したりする話。

本稿では巻三四六「鬼　三十一」から巻三五十「鬼　三十五」までの全所収話の標題と談刻本『太平広記』に記す典拠、説話内容の概略を掲げ[6]、それらを右に掲げた話型一覧に基づき、話型毎に分類した上で分析を行う。

一　不条理なる怪異―巻三四六「鬼　三十一」―

（唐穆宗・長慶年間～敬宗・宝暦年間）

利俗坊民（『宣室志』）　長慶（821～824）の初め、洛陽の利俗坊に住む人が荷車数輌と長夏門を出ようとすると、布袋を便乗させるよう頼まれた。頼んだ人は袋を開かないように言って、利俗坊に入っていった。すると、すぐに利俗坊から哭声が聞こえてきた。荷を預かった人が袋を開けてみると、牛の胎盤のような物や黒い縄が入っていた。預けた人は戻ってきて車の上で痛む足を休めると、約束を破ったことを責め、自分が冥府の使いであることを明かした。冥府から五百人の命を取るよう命じられ、陝・虢・晋・絳（河南省・山西省）などの地を回って洛陽に来たが二十五人しか取れず、徐州（山東省・江西省・安徽省）に向かうつもりだと語った。また、赤瘡（はしか）は虫が原因だとも言った。その年の夏、諸州で赤瘡が流行し、多くの人が死んだ。

太原部将（『宣室志』）　長慶中、裴度が北部留守であった時、その部将の趙という者が熱病にかかった。息子が部屋で薬を煮ていると、黄衣の者が入ってきて小麦粉のような白い粉を薬の中に入れて去った。趙がその事を息子に告げ、息子は薬を捨てた。すると、黄衣の者がまたやって来て粉を薬に入れ、趙はそれを捨てさせた。別の日、趙が昼寝をしていた時に息子が薬を煮て、趙はそれを飲み、数日後に死んだ。

成公逵（『宣室志』）　李公顔が北都（山西省太原市）の守将であった時、部将の成少儀に公逵という息子がいた。ある時、白い衣を来た冥府の使者が成公逵の夢に現れ、冥府が辰年の者を求めていると言って連れて行こうとした。成は自分は辰年ではないと使者を欺き、目が覚めて夢のことを父に話した。翌日、成少儀の辰年の兵が一人、頓死した。

送書使者（『河東記』）　昔、公文書を届ける使者が蘭陵坊（長安城南側の坊）の西門を出たところで、身長二丈あまりの髭が長く高い冠を着けた道士を見た。道士の引き連れている二人の者は身長一丈あまり、羊の角のように髪を結い上げ青いスカートを履き、それぞれ大きな甕を担いでいた。甕の中では数十人の子供たちが泣いたり笑ったりして遊んでいた。使者を見ると道士が従者らに「庵庵」と言い、従者らは「納納」と答え、甕中の子供たちが声をそろえて「嘶嘶」と言って、あっという間に北の方へ走っていなくなった。

臧夏（『河東記』）　進士の臧夏は、長安の安邑坊十字街の東、凶宅と呼ばれている陸氏宅を借りて住んでいた。兄と昼寝をしていると、はかなげな女人が夢に現れ、我が幽恨の詩を聞けと言った。その詩は「卜し

得たり上峡の日、秋天風浪多し、江陵一夜の雨、腸を断つは木蘭の歌」というものであった。

踏歌鬼（『**河東記**』）　長慶中、河中の舜城（河南省泌陽県）の北の鸛鵲楼の下で身長三丈ほどの青い上着に白袴の二体の幽霊が腕を組んで踏歌を歌っていた。「河水は溷溷と流れ、山頭に蕎麦を種く。両個の胡孫は門底に来て、東家の阿嫂は一百を決す。」歌い終えると消えた。

盧燕（『**河東記**』）　長慶四年（８２４）冬、進士の盧燕は新昌里に住んでいた。早朝、坊の北で身長三丈ほどの黒衣の婦人が一丈ほどの雄羊のようなものを連れているのを見た。盧燕が驚いて逃げると、婦人は盧燕の名を呼び「人を見てあれこれ言うな」と言った。

李湘（『**続玄怪録**』）　宝暦元年（８２５）、蒙州（広西チワン族自治区梧州市蒙山県）の刺史李湘は任期満了後の境遇に不安を感じ、巫女を通して幽霊に未来を教えて貰うことにした。巫女が引き合わせたのは盧従史の幽霊であった。盧従史は憲宗の時代に澤潞（山西省・河北省）節度使であったが、朝廷に反抗していた成徳（河北省）節度使の王承元と通じていた罪で康州（広東省）に流され、死を賜った人物である。盧従史は、李湘が都に戻った一ヶ月後に梧州（広西チワン族自治区梧州市）の刺史を拝命することを教えてくれたが、その先は話してくれなかった。また、なぜ転生せずに冥界に止まっているのかと尋ねると、精神をすり減らして妬み傷つけ合う人の世に愛想を尽かしたこと、生死に本質的な差異は無いこと、錬形の術を学び飛行することも幽界明界の行き来も可能になった事などを語った。李湘は予言通り梧州の刺史となり、その地で死んだ。盧従史が梧州刺史の後を話さなかったのはこのためであった。

馬震（『**続玄怪録**』）　扶風（陝西省宝鶏市）の馬震は長安の平康坊に住んでいた。ある昼、驢馬貸しの小僧に東の市からこの家まで婦人を驢馬に乗せたと料金を請求されて支払ってやったが、実際には誰も来ていなかった。そういうことが何度もあり、門を見張らせると、本当に驢馬に乗って婦人が来た。それは馬震の十一年前に死んだ母親で、南山に葬った時のままの服装であった。馬震が叫びながら後を追うと厩に入り、裾を引くと倒れて白骨となった。衣装をきちんと着て、骨も全て揃っていた。よく見ると赤脈が赤い糸のように骨の間を貫いていた。南山の墓は元のままであったが、開いてみると棺の中は空っぽであった。馬震は遺体を別の場所に改葬したが、どういうことかは分からなかった。

劉惟清（『**異聞録**』）　平陰（山東省平陰市）と把関の間は山岳と河川に守られた広々とした無人地帯で、兵家必争の地である。長慶三年（８２３）春、平盧（山東省濰坊市益都県）節度使薛苹が衙門将劉惟清を東平（山東省泰安市）に派遣した際、劉惟清はこの地を通った。既に日が暮れており野営しようとすると、五六万人ほどの軍勢が進んできた。劉惟清はその進路に入ってしまったが、喪服を着た男に馬を奪われそうになり、争っているうちに道から逸れた。喪服の男を追い払ってもとの道に戻ると軍勢は既に通過していた。東平に着くと、落魄して襤褸を纏った術士の皇甫嗜が、先の喪服を着た男は自分だと言った。劉惟清の馬が奪われないように軍勢の通り道から劉を引き離したのであった。

　四年後、李同捷が滄景（河北省・山東省）で反乱を起こした時、天下の兵は皆、平陰から賊の占領地域に入った。幽霊の軍勢は、その先駆けであったのだろうか。

董観（『**宣室志**』）　太原（山西省太原市）の董観は陰陽占候の術を得意としていた。宝暦年間（８２５～８２７）、汾州（山西省）涇州（甘粛省）を旅行し、泥陽郡の龍興寺に留まり、所蔵のすべての経典を読破しようとしていた。寺内には怪異が起こり人が害される部屋があり、気が強く

あえてそこに泊まった董観は死んでしまい、かつて親しくしていた僧の霊習の幽霊と再会した。霊習は董観を水ではなく血の流れる三途の川に連れて行き、川の向こうにある二つの街がそれぞれの転生先だと教えた。人は死ぬと冥官に捕まって裁判にかけられるのではなかったのかと董観が聞くと、現世と同じで犯罪者以外は冥官に捕まえられたりはしないと霊習は答え、川を渡って行った。董観も川に下りようとすると水が開いて道が出来た。董観が驚いて混乱していると、人面の獅子が現れ「私はお前に大蔵経を読むことを命じる。すぐに戻れ。」と言って董観を寺に連れて帰り、董観は蘇生した。董観は大蔵経を読むことに専心し、数年ぶりに帰郷したのは宝暦二年（８２６）五月十五日であった。会昌の廃仏では董観も排斥され、長安に行って占いの術で貴族の家に出入りしていた。沂州臨沂県（山東省臨沂市）の尉であったこともある。これらは『宣室志』作者張読が長安で董観自身から聞いた話である。

銭方義（『続玄怪録』）　宝暦（８２６）の初め、もとの華州（陝西省）刺史・礼部尚書の銭徽の息子、殿中侍御史銭方義は長楽第で蓬髪で青衣を着た幽霊に遭遇した。それは知人の郭登の幽霊で、人は幽霊の陰気に耐えられず死んでしまうことがあるが、貴人は福禄無窮で正気が充実しており幽霊の陰気に中てられないので、あなたの前に現れたのだと郭登は言い、自分がもう少し良い職に就けるように金字金剛経一巻を書写して欲しいと頼んだ。方義は承知し、郭登は陰気の影響への処方として生犀角・生玳瑁・麝香の服用を勧めた。方義は悶絶しそうになったのでそれらを飲んだ。そして翌朝には経工を選び、金字金剛経三巻を書写させ、郭登に手向けた。一ヶ月あまり後、方義が同州（陝西省渭南市大荔県）の別荘に帰ると、十年来会っていなかった岳父の裴が入ってきて、門に出て客を迎えるよう言った。門前に出ると岳父はいなくなり、数十人の役人を従えた紫袍象笏の高官がいた。その顔を見れば郭登であった。郭登は方義のお陰で大出世をすることが出来たが、厨房を預かっているのは以前のままのひどい料理人で、交替させるに必要な功徳を得るため金剛経を七度転読して貰いたいと頼み、方義は承知した。方義が岳父の事を尋ねると、江夏（湖北省仙桃市）で病床に伏せっており今夜危篤になるであろう、神が人にものを頼む際には相手の親しい人が先導しなくてはならないので来て貰い、先に帰らせたのだと郭登は答えた。また、厠の神の巡察に人が行き会ってしまうと死んだり病気になったりするので注意することや、冥府の役人は多くがいつも飢えており、広く鬼神を供養すれば必ず危難の際に助けてくれることなどを話した。郭登自身も厠の神となったのであった。方義は「直接会うと数日体調に影響が出るので、何かを言う時は夢枕に立って欲しい」と郭登に頼んだ。翌日、方義は行いの立派な僧を召して金剛経を四十九遍転読させて郭登に手向けた。郭登は銭方義の夢に現れ、おかげで天の料理を食べることが出来る、あなたに災難がある時は事前に知らせるがそれ以外では来たりしない、広く鬼神を供養することを忘れないで貰いたいと言った。

巻三四六「鬼　三十一」は、穆宗の長慶年間から敬宗の宝暦年間を時代背景とする鬼話が集められている。穆宗は父の憲宗を殺害した宦官王守澄に擁立されて二十六歳で即位、不老不死になるための金丹による中毒で三十歳で崩御。後を継いだ息子の敬宗は十六歳で即位、遊興に耽り十九歳で虐待した宦官たちに暗殺された。二人とも在位期間も寿命もたいへん短かった。皇帝の生死が宦官の手に握られている奇妙な状態の中で、長期間に亘る官僚の大規模な派閥抗争、牛李の党争が始まったのもこの時期であった。本来は中国鬼話は怪異な事象にもその理由が存在す

るのが特徴であるが、混迷する朝廷に対する不安を反映するかのような不条理な説話がこの巻には多く見られる。

ただ、長慶二年（822）に長年争ってきた吐蕃（チベット）と盟約を結び和平を実現するなど、外交においては大きな成果のあった時代でもある。

変鬼帰還譚

「馬震」は母の霊が帰ってくる怪を描くが、その理由は分からない。この説話も巻三四六に多く見られる意味不明の怪事の一つである。また白骨が血管で繋がっているというのは珍しいイメージである。

「銭方義」において、まだ生きている岳父が郭登の先導者にされたのは、瀕死であったが故に、通常は察知できない霊の存在を感じ取り、鬼神に関わることが可能になっていたのであろう。銭方義の兄の銭可復は甘露の変の粛清で家族共々非業の最期を遂げている。銭可復の運命との対比を意識した、銭方義が政変に巻き込まれず天寿を全う出来たのは以前からの陰徳による冥助があったのだという含意がこの説話には込められていると考えられる。

冥界召喚譚

「成公逵」のような他の人が犠牲になって死を免れる話は多い。年回りの一致の他、同名異人が身代わりになるパターンもよく見られる。

「董観」は、冥府召喚譚の典型的な型を批判し、独特の冥界や転生のイメージを作り上げている。

鬼神遭遇譚

「利俗坊民」では疫鬼もまた冥府より課せられたノルマを果たすために汲々としている存在に過ぎず、疫病の流行を天意とする考え方が示されている。

「太原部將」の黄衣の鬼は、冥府より趙の魂を連れてくるよう命じられた冥吏であろう。生死の境にいる趙には鬼が見えるが、普通の人である息子には見えない。それで鬼は趙が昼寝をしている間に薬に粉を混ぜることが出来たのである。

「送書使者」「踏歌鬼」「盧燕」は 身長が二丈（約6メートル）や三丈（約9メートル）の巨人が出現するが何をするわけでもなく、その出現した目的や言動の意味がよく分からないシュールな説話である。長慶期は、宦官が跋扈する中、官僚の大規模な派閥抗争である牛李の党争が勃発している。陰険な政情の閉塞感に対する反動が、大スケールのナンセンスな幻想を生み出したのであろうか。

「劉惟清」は平盧節度使の説話である。各地の節度使も当時の時代状況の重要なファクターであり、鬼話にもしばしば登場する。李同捷は父の李全略の後を継いで横海（河北省）節度使になる事を求めたが認められず、太和元年（827）に反乱を起こした。太和三年（829）に横海節度使の李祐に敗れて投降したが 諫議大夫柏耆に処刑された。

凶宅鬧鬼譚

「臧夏」の鬼詩は、長江を遡る旅をする夫を心配する妻の心情を詠んだものである。鬼詩に対する興味関心が説話の核となっている。

冥事占判譚

「李湘」において、鬼である盧従史の姿は李湘には見えていない。空中より声が聞こえるのみである。巫女には鬼の姿も見えており、概要では省略したが、盧従史が李湘の無礼な態度に怒って席を立った時も巫女がそのことを李湘に伝え、李湘は謝罪して盧従史に戻ってきて貰っている。これは現実的に考えれば、巫女の一人芝居や腹話術であろう。場の主導権を自分が握るために、李湘が下手に出るざるを得ないような状況

を演出したのである。李湘が現世の人間関係を「相妬相賊、猛如豪獣」と評しているのは、宦官の跋扈や牛李の党争が激化してゆく当時の世相を皮肉ったものか。

二　甘露の変―巻三四七　鬼三十二―

（唐敬宗・宝暦年間～文宗・太和年間）

呉任生（『宣室志』）　宝暦中（８２５～８２７）、前の崑山（江蘇省蘇州市）尉の息子の楊は呉郡（江蘇省蘇州市）に仮住まいしていた。楊が数人で虎丘寺に船で詣でた際、その中に洞庭山の庵に住む見鬼人の呉任生もいた。呉は、自分は生者と幽霊を見分けられると言った。岸を歩く赤ん坊を抱いた女を指差し、女は幽霊で抱いているのは生きている赤ん坊の魂だと言い、呉が女に「生きている人の赤子を盗むつもりか」と呼びかけると、女は消えてしまった。その晩、岸辺の家で巫女が神を祀る儀式をしていた。楊たちが訳を聞くと、急死した赤ん坊が生き返ったので、神に感謝を捧げているとのことであった。その赤ん坊は、さきの女が抱いていた赤ん坊であった。

鄔濤（『集異記』）　汝南（河南省東南部周辺）の鄔濤は、経典に通じ、道術に関心を持っていた。婺州義烏県（浙江省金華市義烏市）に旅行し、旅館に滞在して一月余りの頃、夜に二人の腰元を従えた王氏という若い美女の訪問を受けた。王氏は鄔と同衾することを乞い、それより夜ごとに来ては暁に帰ってゆく仲となった。数ヶ月が過ぎ、鄔が幽霊に取り憑かれておりこのままでは死んでしまうと見抜いた道士の楊景霄が鄔に護符を与え、幽霊と話さないように言った。日暮れにやって来た王氏は、門の上の護符を見て罵り、これを取り除かないと禍を起こすと脅した。翌日、楊は鄔に呪力を込めた水を与え、鄔が怒り嘆く王氏にその水をかけると、王氏は以後は現れなくなった。

曾季衡（『伝奇』）　太和四年（８３０）春、監州（山東省）防禦使曾孝安の孫の季衡は屋敷の西の立派な離れに一人で暮らすことになったが、そこはかつて王使君の美しい娘が急死して、その幽霊が現れることがある場所であった。好色者の季衡はその幽霊に会いたいと思い、名香を焚いたりして思いにふけっていたところ、夕刻に侍女と共に神仙のような美女の霊が現れた。幽霊は王麗真と名乗り、季衡の思いの深さに感じてやって来たと述べ、二人は夜を共にした。それより夕方になると王麗真が現れるようになって六十日余りが過ぎた。季衡は二人の関係を秘密にするよう王麗真に口止めされていたが、祖父の部下の将校につい話してしまい、将校らが屋敷に潜んで幽霊が訪れたら季衡が壁を叩いて合図することになってしまった。季衡は壁を叩くことが出来なかったが、事情を察した麗真は「縁が尽きた」と言い、季衡に詩と小物入れ・首飾りを送って消え去った。季衡は麗真を想って衰弱し、数ヶ月してようやく回復した。後に季衡は、王使君の亡くなった愛娘は北邙山（河南省洛陽市）に葬られたことをお針子から聞き、麗真の詩の「北邙空しく恨む清秋の月」という句の意味を理解した。

趙合（『伝奇』）　太和（８２７～８３５）の初め、義侠心に富む進士の趙合は五原（陝西省榆林市定辺県）に旅行した際、夜、砂浜で李という美しい少女と出会った。三年前に奉天（陝西省咸陽市乾県）から洛源（陝西延安市呉起県）に行く途中に蛮人に襲われ、ここで殺されて首飾りを奪われた李は、趙合の義侠心を見込んで、自分の遺骨を奉天の小李村に戻してくれるよう頼んだ。趙合が承知して遺骨を回収すると、朝になって馬に乗った紫衣の男がやって来て、少女が感謝していることを伝え、

趙合の人柄を褒めた。男は尚書の李文悦の幽霊で、元和十三年（８１８）に五原の守将として、都市を包囲した犬戎三十万の軍勢から様々な策略で街を守り抜いたことを語り、この功績を称えて徳政碑を立てるよう、人々に伝えることを趙合に依頼した。

趙合は五原の人々や刺史にこの事を伝えたが妖言をなす者として相手にされず、李文悦は趙合に、五原は一ヶ月のうちに火災に見舞われるがもはや救う気がなくなったと告げて消えた。果たしてその通りになり、五原で多くの人が飢えて死んだ。趙合が少女の遺骨を奉天に届けて埋葬すると、少女が現れ、自分の祖父が貞元年間の得道の士であることを告げ、趙合に煉丹術を授けた。趙合は科挙受験の道を捨てて煉丹を極め、いまも嵩嶽（河南省）の少室山にいる。

韋安之（**『霊異録』**）　河陽（河南省焦作市孟州市）の韋安之は少室山に行く途中に知り合った張道と義兄弟となり、ともに李潜の弟子となった。一年後、博学精通し学流の首席となった張道は、自分が冥司の役人で、才識を増すために人の世で学んでいたことを明かし、韋安之が五年後に科挙に受かり、出世は県の次官止まりであることを告げた。また、緊急時には、自分を呼べば必ず救いに来ると約束して、去って行った。五年後、韋安之は科挙に受かり、杭州於潜県（浙江省杭州市臨安区）の尉となったが、物資を河陰（河南省鄭州市）に運ぶ途中、淇沢浦で淮河の盗賊に襲われた。韋安之が張道に祈ると、雷雨が起き群盗はみな溺れた。韋安之は後に龍興県（河南省宝豊県）の丞となって死んだ。

李佐文（**『集異記』**）　南陽臨湍県（河南省南陽市鄧州市）の北界には祕書郎の袁測や襄陽（湖北省）の掾である王汧の別荘があった。太和六年（８３２）、琴や碁の名手であった李佐文は彼らに好かれて別荘の客となっていた。ある暮れ方、袁の別荘に向かう途中で暗くなってしまい、野中の狭くみすぼらしい一軒家に一夜の宿を借りた。農夫と八九歳の娘の二人が住んでおり、農夫は何故かひどく泣く娘を「きまってしまったことはどうしようもないのだ」とたしなめていた。明け方、道に一壺の酒と紙銭を携えた農婦と出会い、李佐文は昨夜泊まったのが農婦の去年の春に死んだ夫と娘の墓室であった事を知った。農婦は貧窮の中で喪に服して独り身でいたが、税は免除されず、遂に再婚することにして、墓にその事を告げに行こうとしていたのであった。李佐文の話を聞いた女は慟哭し、髪を下ろして寺の雑役をする尼となった。女は王という姓で、開成四年（８３９）にこの女に会った人がいる。

胡濙（**『宣室志』**）　文学の才で名を知られた胡濙は、太和七年（８３３）の進士である。当時の礼部侍郎であった賈餗は二年後には文宗に相国に抜擢された。しかし、その年の冬十月、京兆の乱で敗れた賈餗は王涯とともに逃亡し、捕縛の詔が出された。宦官の仇士良が左禁軍に命じて追跡させ、一人の部将が「胡濙が恩人の賈餗を匿っているのではないか」と告げ、胡濙の家を取り囲んだ。抵抗した胡濙は捉えられ、仇士良によって処刑された。その日、河東郡（山西省）の胡濙の実家では、血のついた緑衣を着た首の無い者が門から庭に入ってきた。胡濙の弟の胡湘が怒って家人に追い出させたが、その三日後に胡濙の凶報が届いた。

巻三四七「鬼　三十二」の説話は敬宗の宝暦年間から文宗の太和年間を時代背景とする。文宗は、異母兄の敬宗が殺害された後、宦官の王守澄に擁立されて十九歳で即位した。太和九年（８３５）、二十八才の時に朝廷を牛耳る宦官たちの大粛清を官僚たちと計画したが失敗し、中心となった官僚や連座した者たちが数多殺害され、文宗は幽閉された。これを甘露の変という。四年後、三十二歳で文宗は崩御した。病死であっ

た。甘露の変は、悲劇的出来事として多くの鬼話のモチーフとなった。

冥婚譚

「鄔濤」は、護符や呪水が登場し、道士による悪霊払いの方法に説話の関心が置かれている。一方、「曾季衡」は、想いを残しながら別れてゆく王氏の優美さと哀感の描写に比重が置かれている。

塚墓宿泊譚

「李佐文」は妻の再婚を亡夫と娘が嘆く話であるが、「巻三四三　鬼二十八」所収「盧江馮媼」は夫の再婚を亡妻が嘆く話であった。

変鬼帰還譚

「胡憑」は甘露の変の犠牲者の話である。賈餗は甘露の変で処刑された四人の宰相「四相」の一人であるが、実際には計画に参与していなかったと考えられている。賈餗が、しばらく潜伏していたことは『新唐書』「賈餗伝」に「餗易服歩行出内、潜身人間」と見える。その後、宦官の指揮する禁軍である神策軍に自ら出頭した

鬼神遭遇譚

「呉任生」は、幽霊を見ることが出来る、所謂「見鬼人」が嬰児を幽霊から救った話である。

「趙合」に登場する李文悦のことは『旧唐書』「列伝第一四六下　吐蕃下」元和十四年（８１９）の条に「十月、吐蕃節度論三摩及宰相尚塔藏・中書令尚綺心兒共領軍約十五万衆圍我塩州数重。党項首領亦発兵、駆羊馬以助。閲歴三旬、賊以飛梯・鵞車・木驢等四面斉攻、城欲陥者数四。刺史李文悦率兵士、乗城力戦。城穿壊不可守、撤屋板以禦之。昼夜防拒、或潜兵斫営、開城出戦、約殺賊万余衆。諸道救兵無至者凡二十七日、賊乃退。」と見える。チベット軍十五万とそれに加担するタングートの軍勢から塩州（五原）を防衛したのである。長慶二年（８２２）にチベットと和平が結ばれたことと、五原の人々が李文悦の功績に冷淡であったことは関係していよう。平和の中で英雄は忘れられたのである。また、少女が向かっていた洛源（呉起県）と殺害された五原（定辺県）は隣接した地域である。

「韋安之」は、冥府の官吏が現世に留学するという点が珍しい説話である。鬼と知り合った人間が自分の運命を教えて貰ったり、危難に際して冥助を得るという展開は、多くの鬼話に見られる。

三　冥吏の報恩―巻三四八　鬼三十三―（唐文宗・太和年間）

辛神邕（『宣室志』）　平盧（山東省益都県）節度使の従事御史辛神邕が、太和五年（８３１）冬、都に召し出されていた時のこと。雇われ者の劉万金が辛神邕の召使いの少年自勤と同居していた。自勤が病で死にそうになった時、紫の衣に高い冠を着した枯れた容貌の男が家に入ってきて、自勤に病気は治ると告げた。男は、自分は人ではなく、劉万金の命を取りに来た者であると言い、稲穂のような青い実を十粒食器に入れ、劉万金はこれを食べて死ぬがそのことを本人に話すとお前にも禍が及ぶと自勤に警告して去って行った。その日、帰ってきた劉万金は腹が減って熱が出たと言って、その食器で食事をした。食べ終える頃に自勤の病気は治った。その後、劉万金は死亡した。

唐燕士（『宣室志』）　晋昌（山西省忻州市）の唐燕士は読書を好み、九華山（安徽省池州市）に隠遁していた。ある雨上がりの月夜に、山道で狼の群れに遭遇し、林に隠れていると、白衣に紗巾を被った五十がらみの男がやって来て「澗水潺潺として声絶えず、渓壠茫茫として野花発く。自ずと去り自ずと来たりて人帰らず、長時唯空山の月に対す。」という

詩を詠んだ。自身も作詩を好み詩名も得ていた唐燕士はこの人と語り合いたいと思ったが、いなくなってしまった。翌日、里人に尋ね、進士で詩作が得意な呉という人と分かったが、その人は数年前に死んでいた。

郭鄴（『**劇談録**』）　郭鄴は櫟陽県（陝西省西安市閻良区）の尉を辞めた後、次の任官ができず、都で困窮していた。その噂が広まる中、青い衣を着た猿のような物の怪が二体、郭鄴がどこに行くにも付きまとうようになり、求職のため人に会おうとしてもじゃまをし、親友たちにも嫌われるようになった。まじないの札を使っても、山林に逃げても縁を切ることが出来なかった。しかし、数年経ったある夜、二体は郭鄴に別れを告げ、郭鄴の厄運によってこれまで付きまとったがもう戻ってくることはないと言った。また、人には見えないが自分たちのような者は多くいることや、これから勝業坊の富豪王氏の元に行き、安品子を利用して破産させることを語った。翌朝、物の怪が去ると、郭鄴は気が晴れ、親友もこれまでとは打って変わって歓迎してくれ、十日も経たぬうちに宰相に面会することがかない、通事舎人に任命された。

　王氏は倹約家で余計な金は使わず、家に美しい楽伎たちが多くいるので外の妓女に関心を持ったこともなかった。しかし、客たちと花街の鳴珂曲にいった時、化粧して門前に立っていた女に王は心が動き、その女の店で宴をした。その宴には郭鄴の従兄弟の張生も相伴していた。女は歌伎の安品子の妹で、安品子が数曲歌った。王は安品子に、人々が訝るほど多くの金やあやぎぬを贈った。それ以来、王は日々安品子に貢ぐようになり、数年も経たぬうちに貧しくなった。

李全質（『**伝異記**』）　隴西（甘粛省）の李全質は、若い頃、沂州（山東省臨沂市）にいた。ある日、蹴鞠をしようと思い、明け方に沂州城の横門の東庭でうたた寝をしていると、丸い笠を被った紫衣の人に「追っ手が来る」と警告された。すぐに緑衣の追っ手が現れて全質を連行しようとし、全質が買収しようとしても応じなかった。しかし、紫衣の人が緑衣の人を追い払ってくれ、全室に犀角の石帯をねだった。全室が人に犀角の石帯の絵を描かせて、日暮れに紙銭とともに燃やすと、その夜、夢枕に紫衣の人が立ち、全質に礼を述べるとともに、全室は水厄の運命にあるが、危難の際には助けに来ることを約束した。

　太和元年（８２７）、年初に大水があった。全室は天平軍節度使（山東省東平県）の副将兼監察となっており、急務で中都（山西省晋中市）から梁郡城（河南省商丘市）に向かう途中、薄氷の張った深い水にさしかかっていた。水練の心得もないまま、やみくもに馬で前進しようとすると、見知らぬ人が泥濘のみの安全に進める道に誘導してくれた。全質は謝礼を渡そうとしたが、相手は案内をしただけだからと言って受け取ろうとせず、額が少なすぎたのかと思って増額しようとすると、もういなくなっていた。思い返すと、紫衣の人のようであった。

　開成（８３６～８４０）の初め、全質は任務で函谷関を越え、寿安県（河南省宜陽県）に回って宿泊していたが、夜半、急な事態で出発しなくてはならなくなった。一・五キロメートルほど進んだところで大雨になったが、引き返す事も出来ずにいると、いつの間にか伝令が馬の傍におり、先導して、暗闇の中で次々と障害物の存在を知らせた。三泉駅（洛陽市）に着いて、伝令に褒美を与えようとしたが既にいなくなっていた。従者に尋ねると、紫衣で丸い笠を被っていたとのことであった。

　会昌壬戌の年（二年　８４２）、済陰（山西省菏沢市）で大水があった。全質と同じ舟に乗り合わせた谷神子（『博異志』著者）が、全質がひどく水を懼れるのを訝ると、全質は、もとはそうでなかったが紫衣の人の応験が何度もあり懼れるようになったのだと答えた。

沈恭礼（『博異志』）　閿郷県（河南省霊宝市）の主簿であった沈恭礼は、太和中、湖城（河南省霊宝市）の尉に任命されたが、赴任してすぐ病に伏せっていた。すると、李忠義という者が堂に入ってきて、ひどく飢えているので食べ物と帽子を恵んで欲しいと頼んだ。恭礼が承知すると、明日の晩、駅庁で働いている張朝に渡してほしいと李忠義は言い、また、蜜陀僧という名の十七八の娘が強引に謁見を求めて来るが決して言葉を交わしてはいけない、話をすると呪われると忠告した。果たして髪を高く結い上げた肌のきれいな女が笑顔で現れ、誘惑するように詩を吟じたが、恭礼は相手にしなかった。蜜陀僧が去ると、李忠義は次に敬寡婦と王家阿嫂という者が現れるがこれとも話してはいけないと言い、やはりその言の通り二体の物の怪が現れ、しばらくしていなくなった。恭礼は李忠義に物の怪が全ていなくなるまでいてくれるよう頼み、李忠義は手に三個の髑髏を玩ぶ物の怪が現れたのを退治して去って行った。翌日、恭礼は食物と帽子を用意し、駅庁の役人の張朝を召して渡した。張はもとは巫人で、最近客死した李忠義の幽霊をよく知っていた。その夜、恭礼の夢に李忠義が現れ、礼を述べ、蜜陀僧には今後も気をつけるように言った。恭礼は湖城に二ヶ月いたが毎夜蜜陀僧が現れ、閿郷県に帰ると一晩おきになり、やがて間遠になった。僧に言われて生臭を断つと全く来なくなった。

牛生（『会昌解頤録』）　科挙受験のため河東（山西省）を出発した牛生は、華州（陝西省）の宿で空腹と寒さに苦しむみすぼらしい旅人に乞われてうどんを奢った。夜明け頃、旅人は牛生を門前に呼び出し、自分が冥界の使者であることを告げ、昨日の礼に三通の封書を書いて渡し、困った時に開くように言った。都に着いた牛生は飢えと貧困に苦しみ、一通目を開くと「菩提寺の門前に坐すべし」とあった。菩提寺に行くと、寺の老僧は牛生の叔父である晋陽（山西省太原市）長官の金三千貫を預かっており、それを牛生に返してくれた。それで牛生は金持ちになったが、出世の目処が立たず二通目を開くと「西市の料理店、張家楼に行け」とあった。そこでは科挙の試験官の息子が裏口合格を斡旋しており、牛生は千二百貫を渡して合格した。様々な役職を歴任して河中節度（山西省）副使となったが病気になり、三通目を開くと「家の事を処置するように」とあった。それで沐浴して遺書をしたため、書き終えて死んだ。

韋斉休（『河東記』）　韋斉休は様々な官職を歴任し、王璠の下で浙西（浙江省西部）団練副使となった。太和八年（８３４）に潤州（江蘇省鎮江市）の官舎で死亡した。家人が死者の衣服を着替えさせる小斂の儀式を夜中に執り行おうとすると、西の壁の下から韋斉休の声がした。大声で妻に哭くの止めるように言い、妻は気絶した。妻が息を吹き返すと、韋斉休は、諸事自分に相談するよう言い、自らの墓所や都への帰還の指示を周りの者に行い、盗みを働こうとする使用人には罰を与えた。都に帰って十数日経った夜中、その日に死んだばかりの蕭三郎が韋斉休に会いに来て、韋斉休は家人に食事などを用意させてもてなした。二人は、蕭三郎が死ぬ数日前に無意識に死の予兆のような詩を作っていたことを語り、韋斉休もその場で詩を作り、蕭三郎に贈った。また数日して韋斉休の妻の兄で長安県令の裴観が来ようとしたが、韋斉休の幽霊のことは耳に届いており、啓夏門外まで来て恐怖に心がくじけ、弔問をせずに帰ってしまった。韋斉休の周囲は今も恐れながら暮らしている。

「巻三四三　鬼二十八」は、冥吏に恩を施して、運命を好転してもらう説話が多く見られるのが特徴である。時代状況に対する閉塞感と僥倖への憧れは表裏一体であろう。

変鬼帰還譚

「韋斉休」において、韋斉休は死後も諸事を自分で指示し処置してゆくが、家長の霊が、家を仕切り続けるというのも一つの定型であり、様々な類話が見られる。

鬼神遭遇譚

「唐燕士」は鬼詩の詩話である。

「郭鄴」における青衣の物の怪は貧乏神のような存在であるが、恣意的に人に不幸をもたらしているわけではなく、命を取りに来る冥吏と同じく、予め定められた人の運命の執行者なのである。

「李全質」における緑衣と紫衣はどちらも冥吏であろう。紫衣の人は本来は緑衣の冥吏によって死ぬはずであった李全質を救って石帯を貰い、その後も守り続けたのである。

「沈恭礼」も冥吏の報恩譚である。取り憑こうとしている霊鬼と言葉を交わしてはいけないという注意は、前巻の「鄔濤」にも見られる。

「牛生」も冥吏の報恩譚であるが、僅かな慈悲心で手に入れた三通の手紙の力だけで財産も地位も易々と手に入れ、死後の愁いもなくなった牛生の人生は、人間の予め定まった運命「定数」に対する皮肉を込めた戯画のようでもある。

冥界召喚譚

「辛神邕」における紫衣の人は冥府の使者であり、自勤がその姿を見ることが出来たのは、病気のため、死に近い状況にあったためと考えられる。

四　科挙と幽霊と詩―巻三四九　鬼三十四―

（唐文宗・太和年間～開成年間）

房陟（『**通幽記**』）　清河県（河北省邢台市）の村の老婆が禅師に会いに行く途中、悲しげに啼きながら小さい丘の周りの草むらをうろうろする白衣の婦人を見かけた。近づこうとすると遠くにおり、離れると元のところにいるのであった。老婆は婦人は人ではないと思い、禅師に話し、禅師はこの事を壁に書き留めた。それから一ヶ月余り後、県尉の房陟の妻が急死した。滎陽（河南省鄭州市滎陽市）の鄭氏の出の美女であった。鄭氏が葬られたのは白衣の婦人がいた丘で、鄭氏の容貌や衣服は、老婆が見た婦人とまったく同じであった。

王超（『**酉陽雑俎**』）　太和五年（８３１）、復州（湖北省仙桃市）の医師王超は針の名手で、あらゆる病人を治すことが出来た。ある時、王超は死んで一夜を経て蘇生し、その間の次のような体験を語った。王の御殿のような所で、左腕に腫瘍のある患者を治療すると、その人は王超に「畢」を見せるよう黄衣の役人に命じた。王超が役人について行き「畢院」と書かれた場所に入ると、庭中に数千の人の眼があり、瞬きを繰り返していた。役人はこれが「畢」だと言った。二人の魁偉なる者が左右から大きな扇であおぐと、畢は飛んでいったり、人に変わって走って行ったりして、やがてなくなった。黄衣の役人が「生類は死ぬとまず畢になるのだ」と言ったところで、王超は蘇生した。

段何（『**河東記**』）　客戸里（陝西省西安市）に住む進士の段何は太和八年（８３４）夏、病に伏せっていた。少し良くなって髪を洗っていると、上半身裸の男が壁の隙間から現れ、段何にさかんに嫁取りを勧めた。科挙に合格するまで結婚する気はないと断ったが、結納も挙式も必要ない

と言って、二人の美しい侍女と二人の荷物持ちを従えた輿を呼んで、花嫁を部屋に引き入れた。男は一目見てみろとしつこく言ったが、段何は疲労で伏せり、顧みなかった。しばらくして皆去ったが、花嫁は落胆した心情を詠んだ詩を残していった。署名はなく「我」とのみあった。この日以来、段何の病は日毎に治っていった。

韋鮑生妓（『纂異記』）　酒好きの鮑生は金持ちで何人も妓女を囲っていた。開成の初め、歴陽道を旅して定山寺（江蘇省南京市）に泊まり、妻の弟の韋生が科挙に落ちて東へ帰るのと出会い、宴をした。鮑生は維陽（江蘇省揚州市）に泊まっていた時に馬が次々と死んで足りなくなり、旅に連れてきた伎女たちのうち二人だけを同行させていたが、その場で韋生が買ってきた西北の良馬と伎女を交換した。いまだ宴が終わらぬうちに、多くの従者を連れた衣冠の人が二人入ってきた。定山寺は大使も通る場所なので高位の役人かもしれないと思い、鮑生と韋生は隠れた。入ってきた二人は南朝の文人の謝荘と江淹で、先客は馬と妾を交換したらしいと笑い、飲み始めた。江淹は今日の科挙では詩文の技巧が重視され、自分たちの作品でも失格になってしまうと言い、謝荘は詩文の技巧のみを重視する科挙を批判した。それから二人は庭の芭蕉の枝を折らせて、その葉にそれぞれ「妾を以て馬に換う」を題に賦を記し、江淹が四韻を賦し終えたところで芭蕉の葉が尽きた。それで韋生が赤い便箋を差し出すと、二人は驚き「なぜ現世の人間がこのように近づけるのだ。そなたが後に爵位を得る身でなければ、我らには会えないはずだ。」と言い、韋生に「将来、文章で人を選ぶ立場になったら、小手先の技巧ではなく、本当に優秀な人物かどうかを見よ。」と言い残し、十数歩歩いて突然いなくなった。

梁璟（『宣室志』）　開成中、長沙で孝廉科に推薦された梁璟は、上京する途中、商山（陝西省）で宿泊した。八月十五日で、夜半に古い衣冠を着した三人の人が現れ、庭で詩を吟じたりした。梁璟は幽霊だと分かったが、度胸があったので挨拶し、蕭中郎・王歩兵・諸葛長史と名乗る三人と酒を飲み、秋月を題に連句を行った。幽霊たちは歌妓を呼んで歌い、皆でまた連句をした。蕭中郎が梁璟に進士科の受験生かと問い、孝廉科に推薦されたのだと答えた。蕭中郎は孝廉科でも詩が作れるのかねと笑い、梁璟が怒って叱りつけると、蕭中郎も腹を立て、幽霊たちは散って行き杯盤も消失した。それより梁璟は病気になり、しばしば蕭中郎たちがやってくる夢を見た。長安に着き、術士李生の辟邪符を身につけると怪異は絶えた。

崔御史（『宣室志』）　広陵（江蘇省揚州市）の官舎は幽霊がおり、住んだ人が一晩で死んでしまうのであった。御史（監察官）の崔が住むことを希望して、その館に泊まると寝ている間に寝台が庭に移動しており、服が湿っていた。三度もそのような事があり、幽霊の存在を確信した崔は、酒で霊を祀ると、空中より霊の声がした。霊の正体は、成人前に死んだ三姉妹の一人で、父母が都城の北に埋葬したが、その後、都城がそこまで拡張され、遺体もこの館の東北の隅に遷されてしまったのであった。霊は崔に自分たちを埋葬しなおすことを頼み、この十年、これまでもこの事を訴えようとしたが住む人が驚いて死んでしまった、害意はなかったと泣いて語った。翌日、遺骨を禅智寺に葬り、里人は皆でこれを祀り、三女墳と呼んだ。以降、館は何事も起きなくなった。

曹唐（『霊怪集』）　進士の曹唐は詩才で世に知られていたが、なかなか科挙に合格できないまま、江陵の仏寺の池亭に寓居していた。池亭は風情があり、曹唐はいつもそこで詩を賦しており、ある時「水底天有りて春漠漠たり　人間路無くして月茫茫たり」という句を得て、これまでよ

り良い句を作れたと思った。翌日また池亭に座っていると、二人の白衣の婦人が件の曹唐の詩句を吟じていた。二日と経っていないのに他人が知っていることをいぶかしく思った曹唐は問い質そうとしたが、女たちは答えず、十歩も歩まぬうちに見えなくなった。寺僧の法舟に曹唐がこの事を話すと、法舟は二日前に尋ねてきた若い男が見せた青い便箋にその詩が書かれていたと言い、実物を唐に見せた。曹唐は呆然となり、数日後、寺中で死んだ。

「巻三四九　鬼三十四」は、科挙の受験生を主人公とする説話が多く収録されている。中国の他の文芸と同じく、鬼話も科挙との関わりは深く、それは清代の『聊斎志異』に結実するに至る。

変鬼帰還譚

「房陟」の鄭氏の霊は、死に先んじて出現しているので生き霊とも考えられるが、その服装も納棺時のそれを先取りしたものになっているのは説明がつかない。生き霊ではなく予兆が具現化した別のものであったのかもしれない。

冥界召喚譚

「王超」において王超が治療したのは冥府の王であり、泰山府君であると考えられる。生き物の魂の転生のシステムが独特のイメージで描かれている点が注目される話である。

鬼神遭遇譚

「段何」は、知識人の理性は鬼を寄せ付けない力を持っているという中国鬼話に共通する基本概念に基づく話である。

「韋鮑生妓」はいにしえの文人を借りて科挙の実態を批判する風刺小説である。馬と妓女の交換を持ち掛けるなど、財力はあるが人格低劣な落第書生である韋生が将来は試験官になることが示唆されているのも大いなる皮肉であろう。

「梁璟」は、科挙受験生といっても受験する科によって人の見る目が随分違っていたことを反映している。進士科は合格率が極端に低く、合格には詩賦の才を必要とした(7)。

「曹唐」は進士科の受験生が主人公であり、彼らにとって詩は全身全霊を込めて作り上げた自己の存在価値の証明である。その詩が、創作する前から運命によってその内容も予め定められていたということの衝撃が曹唐に死をもたらしたのである。

凶宅鬧鬼譚

「崔御史」はステレオタイプな展開の凶宅譚であるが、都市の拡張が事件の原因となっている点に特色がある。この話で問題を解決したのは、寝台の移動に対して、恐れるのではなく、霊鬼の存在を確信できる根拠と考えた崔御史の理性的な対応であった。

五　廃仏の時代―巻三五〇　鬼三十五―（唐武宗・会昌年間）

許生（『纂異録』）　会昌元年（８４１）春、孝廉科を受験した許生は落第して東に帰る途中、寿安（河南省宜陽県）で白衣の翁が西から朗吟しつつ馬を走らせて来るのに行き会い、馬を寄せて名を尋ねたが翁は微笑して答えなかった。翁を幽霊だと察したが許生はついて行き、夜になって噴玉泉に至った。そこには四人の高官らしき人々がいて、彼らは翁を見ると「玉川、遅いぞ」と言った。翁は来る途中に見つけた甘棠館のあずまやの柱に記されていた四人のうちの誰かを悼む詩を詠じ、みな悲しんで顔を覆った。そして「噴玉泉に旧遊を感じ懐いを書す」の題でそれ

ぞれ七言詩を作り、吟詠する声は谷に響き、鳥獣が呼応した。しばらくして東から車の鈴の音が聞こえてくると、みな泣く泣く急ぎ散って行った。許生が宿泊先の甘泉店に着くと、まだ夜中だと店の媼に文句を言われ、許生は詳しく事情を話した。媼が、それらしい人が深夜に馬で酒を買いに来たと言って翁の払った銭を確かめてみると、全て紙銭であった。

顔濬（『伝奇』）　会昌中（８４１～８４６）、進士科の試験に落第した顔濬は広陵（揚州市）に遊び、さらに建業（南京市）に足を延ばす途次、船中で趙幼芳という古風な服装の腰元と知り合い、何度もごちそうした。幼芳は陳隋の間の事をよく知っていたが、何故かは答えなかった。別れ際に幼芳は顔濬に礼を述べ、中元に建業の瓦官閣に来るように言った。中元節の日に顔濬が瓦官閣に行くと、幼芳は陳朝の後主の妃であった張貴妃こと張麗華と孔貴嬪に顔濬を引き合わせた。張貴妃はもうすぐ瓦官閣が取り壊されてしまうので一別のために来たのだと言い、晩に幼芳とともに自宅に来るよう顔濬に言った。顔濬が屋敷に行くと、張貴妃は陳朝の故事や煬帝の暴政について語った。幼芳は江総の妾から張貴妃の侍女となり、陳が隋に滅ぼされてからは隋の後宮に入り、江都（揚州市）では煬帝の食事係となっていた。宇文化及の兵が攻め込んだ時、煬帝をかばって死に、蕭皇后の計らいで殉葬されたが、後に煬帝は唐の高祖によって揚州の北、雷塘の帝王陵に改葬された。残された幼芳は、時が巡って張貴妃に改めて御目見得したのであった。四人は詩を詠み、鶏が鳴くと孔貴嬪らは退出し、顔濬は張貴妃と寝に就いた。夜明けに別れ、次の日は顔濬はぼんやりしていた。宿にもう一泊し、翌日屋敷の場所に行ってみると、そこは陳朝の宮女の墓であった。数ヶ月後、瓦官寺が廃寺となり、瓦官閣は取り壊された。その後、顔濬は広陵に行き、煬帝の旧陵で趙幼芳の墓を見つけ、酒を供えた。

郝惟諒（『酉陽雑俎』）　荊州（湖北・湖南省）の民の郝惟諒は気性が荒く喧嘩っ早かった。会昌二年（８４２）の寒食の日、仲間と郊外に遊び、墓場で酔って寝てしまい、宵に目が覚めた。帰路、あばら家で飲み物を乞うたところ、憔悴した女に胆力を見込まれ、頼み事をされた。女は府衙の兵士の妻であったが、夫は太和中に辺境の戦に行ったまま帰らず、自身は疫病で死んでしまった。親戚も無く、近隣の人々が殯でここに柩を安置してくれたが、十年経っても埋葬してもらえていない。しかし、遺体が土に還らないと魂が冥府の籍を得ることが出来ないので、自分の遺体を埋葬して欲しいとの事であった。郝が埋葬の費用が無いと言うと、女は幽霊となってからも数年にわたり胡氏のために雨合羽を作ってきたので金は充分あると言った。翌朝、郝が胡氏を訪問して確認すると女の言ったとおりで、共に殯屋に行くと銭が散らばっていた。郝と胡はさらに皆から集めた金を足して立派な葬儀をしてやり、女は夢に現れて二人に礼を述べた。

浮梁張令（『纂異記』）　浮梁県（江西省景徳鎮市）令の張は、事業を江淮の間に広げ莫大な富を蓄積していた。任期満了で都へ戻る途中、華陰（陝西省渭南市）で食事をした際、勝手に席に着いた見知らぬ黄衣の男にごちそうを食わせてやったところ、男は死ぬべき人の名簿を各部署に届ける冥府の役人で、見せて貰った名簿には「貪財好殺、見利忘義の人、前浮梁県令張某」と張の名があった。黄衣の男の助言に従い、張はまず西岳華山（陝西省華陰市）の神、金天王の岳廟に参拝して多額のお布施を約束した。金天王は南岳衡山（湖南省）の神に博打で負けて支払いを迫られていた。それから張は蓮華峰の謫仙、劉綱を訪ねて天の神への取りなしを頼んだ。劉綱ははじめは渋っていたが、金天王からの手紙を見て協力することにし、そのおかげで五年の延命を得ることに成功した。

張が黄衣の男に謝礼を申し出ると、男は今の文書輸送の仕事は辛いので、張が金天王に約束通りお布施をする際に、自分を門番にするよう頼んでくれれば、神への供物を満腹するまで食べられるようになると言った。しかし、張は延命してくれたのは天の神であるのに、土で作られた金天王像にお布施をすることはないと考え直し、お布施をしなかった。翌日、黄衣の男が現れて張を叱って消え、まもなく張は病にかかり、遺書も書き終えることが出来ずに死んだ。

歐陽敏（『瀟湘録』） 陝州（河南省・山西省）の東十五キロメートルは旅館が無く、日暮れに旅人が至ると遠くから迎えに来て仮の宿りをさせ、夜が明けてから先に進ませる者がいたが、旅人は往々にして死んでしまうのだった。揚州の欧陽敏が日暮れに着いた時は、幽霊が老人の姿で迎えに来た。老人の家での雑談で欧陽敏が天が人の行為の善悪を全て監視していることを語ると老人はひどくおびえた。欧陽敏が不審に思い、人を害する妖鬼がいれば必ず神に訴えて成敗して貰うと言うと、老人は自分が人を害する幽霊であることを明かし、帝王の運命を記した予言書を差し出して欧陽敏に許しを乞うた。夜明けに欧陽敏は何も言わずに立ち去り、振り返ると、そこは荒れた墳墓であった。予言書は篆書で書かれており、欧陽敏が人に翻訳して貰い、世に広まった。

奉天県民（『西陽雑俎』） 会昌五年（８４５）、奉天県（陝西省咸陽市乾県）国盛村の民の劉という者が発狂して走り回った。家人はまじない師の侯公敏を呼んで来て治してもらおうとしたが、劉は侯公敏に「治すのにお前の手は借りぬ」と言って、田んぼで肌脱ぎになり、何かを撃つように薪を担ぐ天秤棒を振り回した。しばらくして劉は「病はもう治った。幽霊の首を落とし、田んぼに埋めた。」と言った。兄弟とまじない師が一緒に確認に行くと、劉は赤髪が十数本附いている髑髏を掘り出した。その後、劉の病気は治った。

「巻三五〇　鬼三十五」は、武宗の会昌年間を時代背景とする説話が収められている。武宗は病死した兄、文帝の後を継いで宦官の仇士良らに擁立されて二十七歳で即位した。武宗の時代の著名な出来事としては「会昌の廃仏」が挙げられる。本巻に収録する「顔濬」には「閣因寺廃而毀（瓦官寺が廃寺となり瓦官閣は取り壊された）」と、廃仏が作中に反映されている。武宗は不老不死の丹薬の服用による中毒で三十三歳で崩御した。その治世は宦官の力を削ぎ、国力を高め、「会昌の中興」とも呼ばれている。

冥婚譚

「顔濬」は歴史上の美女と一夜を共にするという型の冥婚譚に属するが、江総・張麗華・煬帝に仕えた趙幼芳の数奇な運命を辿るもう一つのストーリーラインや、陳・隋の二王朝の滅亡と呼応する会昌の廃仏による瓦官閣の取り壊しなどの要素が絡み合い、スケールの大きなロマンと栄枯盛衰の哀感に満ちた作品になっている。

塚墓宿泊譚

「歐陽敏」において、悪鬼が予言書を差し出すのは、人々の未来の運命を知ることが出来るという鬼の特徴を反映したものである。

冥界召喚譚

「浮梁張令」は、冥界召喚譚としては延命工作が五嶽の神や謫仙を巻き込む大規模なものである点が特色である。現実の官界における政治工作のパロディであり、張の救いようのないがめつさによる破滅に至るまで、全編が地方に派遣された貪官のすさまじさを風刺する内容になっているとともに、明確な時代相の影響がある。武宗は「会昌五年正月三日

南郊赦文」（『文苑英華』巻四二九所収）において「朝列の衣冠、或いは代承の華冑、或いは清途に在るもの私に質庫・楼店を置き人と利を争うは今日已後並びに禁断す。」と官僚や貴族、公務員のサイドビジネスを厳禁しているが、本話の冒頭には「浮梁の張令、家業江淮の間に蔓延し、金を累ね粟を積むこと計うるに勝うべからず」と、張は武宗の指弾する官僚の典型として描かれているのである。話中で上帝が張を厳しく咎めるのも、当時の現実の政治を反映していることに留意すべきであろう。

鬼神遭遇譚

「許生」は出典が『纂異録』とあるが、これは『纂異記』のことである。白衣の翁が会った四人の幽霊は甘露の変で犠牲となった四人の宰相、李訓・舒元輿・王涯・賈餗であり、玉川と呼ばれている白衣の翁は文人の盧仝であると古来より解釈されている。ただ、甘露の変の「四相」と盧仝がどのように関連するのかは不明な点が多い(8)。

「郝惟諒」は埋葬前に一定期間、遺体を殯屋に安置した習慣を背景とする説話である。

「奉天県民」は、田中に埋もれていた骸骨の霊に取り憑かれた男が自力で霊を引き剥がしたとも、骸骨が発見されるように霊が誘導したとも解釈できる話である。

まとめ

「鬼三十一」から「鬼三十五」は、宦官が跋扈する中、官僚間の派閥争いが激化してゆき、甘露の変、会昌の廃仏へと展開する中央の政治状況に加え、科挙受験者の苦悩、節度使の動きや、周辺諸国との関係の変化なども反映された説話群で構成されており、中唐から晩唐へと至る時代の見事な縮図となっている。

そして次の、唐の滅亡の時代へと進むのである。

注

（1）『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第21号（２０１５）
（2）『日本女子大学紀要 人間社会学部』第26号（２０１６）
（3）『日本女子大学紀要 人間社会学部』第27号（２０１７）
（4）『日本女子大学紀要 人間社会学部』第28号（２０１８）
（5）『日本女子大学紀要 人間社会学部』第31号（２０２１）
（6）『太平広記』本文については、汪紹楹校点『太平広記』（中華書局　１９６１）に拠った。また各説話の解釈においては、木村秀海監修・堤保仁編『訳注 太平廣記 鬼部三』（やまと崑崙企画　二〇〇四）を参考とした。
（7）宮崎市定『科挙史』（平凡社　１９８７）
（8）本話について詳細に分析した先行研究として大角哲也「唐代小説集『纂異記』所収「許生」について―「甘露の変をめぐって」―」（中國中世文學會編『中國中世文學研究：四十周年記念論文集』白帝社　２００１）がある。

The ghost stories of “ Taiping Guangji” vol.31~vol.35

MITTA Akihiro

［**Abstract**］“Taiping Guangji (Extensive Records of the Taiping Era)” is a collection of stories compiled under the editorship of Li Fang, first published in 978. The book is divided into 500 volumes and 40 volumes of them are ghost story parts. In this paper, I have analyzed vol.31~vol.35 of the ghost story parts.The results of the analysis, I have cleared ideological features and features on the story type of Tang dynasty early ghost stories.